翻字本文　凡例

一、翻字は、複製本『善信聖人親鸞伝絵』（続々日本絵巻大成、伝記・縁起篇1、中央公論社、一九九四年）に基づく。ただし、巻第一の巻頭は、専修寺宝物特別展観によって、原本で確認した（一九九八年四月六日）。また、画中の詞は、翻字の対象としていない。

一、原本の配行・字詰を保ち、訓点・諸符号をも出来るだけ忠実に翻字するよう努めた。しかし、製版の制約上十分でない場合がある。常に複製本と照合されんことを期待する。

一、漢字の字体は、ＪＩＳ規格で利用できる範囲において通行の康熙字典所載の正字体に従うことを原則とした。ただし、原本の字体のままにしたものがある。

一、平仮名・片仮名の字体は、現行の字体に改めた。

一、漢字に加えられた声点は、漢字の右下に（平）（平軽）（上）（去）（入軽）（入）として示した。

一、虫損・破損は、□で示し、その欠落箇所は残画からの類推あるいは他本に依って（　）内に補った。

一、本文の振り仮名および左右の注には、後筆と見られるものがある。これは、　に入れて区別した。

一、本行の°は、原本に存する補入符である。

一、本翻字本文は、佐々木勇・花岡健吾・上野真・児玉拓世・佐藤理絵・寺田守で読み進めた原稿を元に、第一次稿を佐藤理絵が作成し、佐々木勇・佐藤理絵・寺田守・田中哲宙・森田朋子で入力した。

一、製版にあたっては、金水敏氏のホームページ「LaTeXによる古典籍のコード化のためのマクロ作成」で公開されているマクロを使わせていただいた。

一、製版のもとのファイル作成には、寺田守提案の方式がとられ、入力の全般に亘って同氏の尽力が大きかった。

〔巻一〕

一1 善信聖人親鸞傳繪

一2 夫聖人の俗姓は藤原氏　天児屋根

一3 命二十一世の苗裔大織冠鎌子大臣の

一4 玄孫近衛大将右大臣
贈左大臣
号二後長岡大臣一或イハ号二□□□□□□□□（閑）（院）

従一位内麿
大臣一
贈正一位太政大臣房前公□□□□（孫）

大納言式部卿真楯息□□□□□□□□□□□□（也）

一5 六代の後胤弼宰相有國卿五代の孫皇太后

一6 宮大進有範の子也しかあれは朝廷

一7 に仕て霜雪をも戴射山に趨て

一8 榮花をも發へかりし人なれとも

一9 興法の因うちにきさし利生の

一10 縁ほかにもよをひしによりて九

一11 歳の春比阿伯従三位範綱卿狭守
「サキノワカサカミ」
于二時一従四位上前若狭守後白河上皇□□（近）（キン）
父ノ兄ナリ
臣也上人養父

一12 前大僧正慈圓慈鎮和尚是也
法性寺殿御息月輪殿長兄
の貴坊へ

相具し

一13 たてまつりて鬢髪を剃除し給き

一14 範宴少納言公と号す自二爾一以来しは〈

一15 南岳天台の玄風を訪「トフラウ」てひろく三觀

一16 佛乗の理を達しとこしなへに楞

一17 嚴横川□□□（ワウセン）の餘流を湛てふかく四教

一18 圓融の義に明なり

一19 建仁第三の暦春のころ聖人廿九歳隱

一20 遁のこゝろさしにひかれて源空聖

一21 人の吉水の禅房に尋參たま

一22 ひき是則世くたり人つたな

一23 くして難行の小路まよひやすき

一24によりて易行の大道におもむ
一25かんとなり真宗紹隆の大祖聖人
一26ことに宗の渕源をつくし教
一27の理致をきわめてこれをのへ
一28たまふに立ところに他力攝生の
一29旨趣を受得し飽まて凡夫直
一30入の真心を決定しまし〳〵けり
一31建仁三年辛酉四月五日ノ夜寅時聖
一32人夢想告まし〳〵き彼記云六角堂
一33の救世菩薩顔容端嚴の聖僧の形
一34を示現して白納（衲）の袈裟を着服せ
一35しめ廣大の白蓮花に端座して
一36善信に告命して言行者宿報設
一37女犯我成玉女身被犯一生之間能荘
一38嚴臨終引導生極楽文救世菩薩
一39善信に言此是我誓願也善信此誓
一40願の旨趣を宣説して一切群生に
一41きかしむへしと云々尓時善信夢中
一42にありながら御堂の正面にして
一43東方をみれは峨々たる岳山あり
一44その高山に数千万億の有情群
一45集せりとみゆそのとき告命
一46のことく此文のこゝろをかの山に
一47あつまれる有情に對て説きかし
一48めをはるとおほえて夢悟了云々倩、
一49此記録を披て彼夢想を案する
一50にひとへに真宗繁昌の奇瑞念佛
一51弘興の表事也然者聖人後時被ニ
一52仰ー云佛教むかし西天より興て經論
一53いま東土に傳る是偏に上宮太子
一54の廣徳山よりも高く海よりも
一55深し吾朝欽明天皇の御宇に

一56これをわたされしによりて即浄土
一57の正依経論等此時に来至す儲君
一58もし厚恩をほとこしたまはすは
一59凡愚いかてか弘誓にあふ事を得
一60ん救世菩薩は即儲君の本地なれは
一61垂迹興法の願をあらわさんかた
一62めに本地の尊容をしめすところ也
一63抑、又大師聖人源空もし流刑に
一64處せられたまはすはわれまた配所
一65に赴かんやもしわれ配所におも
一66むかすは何由か邊鄙の群類を化せん
一67これなを師教の恩致なり大師聖人
一68すなわち勢至の化身太子又觀音の
一69垂迹なりこのゆへにわれ二菩薩の
一70引導に順て如来の本願をひろむ
一71るにあり真宗因ニ茲一興し念佛由ニ斯一
一72煽なり是併聖者の教誨によりて
一73更愚昧の今案をかまへす彼二大士
一74の重願唯一佛名を専念するにた
一75れり今の行者錯て脇士に仕ことな
一76かれ直に本佛を仰へしと云々かる
一77かゆへに聖人親鸞傍に皇太子を崇
一78たまふ蓋斯佛法弘通の浩なる恩
一79を謝せんかためなり

〔巻二〕

二1黒谷の先徳源空在世のむかし矜哀
二2の餘或時は恩許を蒙て製作を
二3見寫し或時は真筆を降て名字
二4を書賜すなわち顕浄土方便化身土文
二5類六云親鸞上人選述然愚禿釋鸞建仁辛酉暦
二6棄ニ雑行一兮歸ニ本願一元久乙丑歳蒙ニ恩恕一兮書ニ選

一7 擇一同年初夏中旬第四日選擇本願念佛
一8 集内題字并南無阿弥陀佛往生之業念佛
一9 爲二本一与二釋綽空一以二空真筆一令三書二之一同日空
一10 之真影申預奉二圖畫一同□(キ)二年閏七月下旬
一11 第九日真影銘以二真筆一令二書一南無阿弥陀
一12 佛与若我成佛十方衆生稱我名号下至十
一13 聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛
一14 當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生之
一15 真文又依二夢告一改二綽空字一同日以二御筆一令三書二
一16 名之字一了本師聖人今年七旬三御歳也
一17 選擇本願念佛集者依二禪定博陸(月輪殿兼實カネサネ)法名圓照(クワンハク ホフミヤウエンセウ)一撰集一也真宗之簡要念佛之
一18 之教命一所三令二撰集一也真宗之簡要念佛之
一19 奥義攝三在于二斯一見者易二諭一誠是希有最
一20 勝之華文無上甚深之寶典也渉二年一渉二日一
一21 蒙二其教誨一之人雖二千萬一云二親一云二疎一獲二此
一22 見寫一之徒甚以難尓既書二寫製作一圖二畫□(ル)
一23 真影一是専念正業之徳也是決定往生
一24 之徵(ママ)也仍抑二悲喜之涙一註二由一来之縁一云々
一25 おほよそ源空聖人在生の古他力
一26 往生の旨をひろめたまひしに世あ
一27 まねくこれに挙人こと〳〵くこ
一28 れに歸紫(去)禁(平)青(平)宮(平)の政を重する
一29 砌にも先黄金樹林の蕚にこゝろ
一30 をかけ三(平軽)槐(平)九(平軽)棘(入)の道を正する家
一31 にも直四十八願の月をもてあそふ
一32 如之戎(平濁)狄(入)のともから黎(平)民(平)のたくひこ
一33 れをあふきこれをたふとひすといふ
一34 ことなし貴賤轅をめくらし門前
一35 市をなす常随昵近の緇徒そのかす
一36 あり都て三百八十余人と云々しかあ

二37りといへとも親その化を受懃その
二38誨を守族はなはたまれなり善信或
二39時申たまはく予難行道を閣て
二40易行道にうつり聖道門を遁て
二41浄土門に入しより以来芳命をかう
二42ふるにあらすよりは豈出離解脱
二43の良因を蓄哉喜の中の悦何事
二44か如ニ之一しかあるに同室の好を結てとも
二45に一師の誨をあふくともからこれお
二46ほしといへとも真實に報土得生の
二47信心を成したらむ事自他をなし
二48くしりかたし故に且は當来の親友
二49たる程をもしり且は浮生の思出
二50ともし侍らんかために御弟子參集の
二51砌にして出言つかうまつりて面〻の意
二52趣を試と思ふ所望ありと云〻大師
二53聖人云此条尤可ニ然一即明日人〻来臨
二54の時おほせられいたすへしと而翌日
二55集會のところに聖人親鸞のたまはく
二56今日は信不退行不退の御座を両方に
二57わかたるへきなり何の座につきたま
二58ふへしともおの〳〵示給と其時三百余
二59人の門侶みな其意を得さる氣あ
二60り于ニ時一法印和尚位聖覺并釋信空法蓮上人
二61信不退の御座に可ニ着一と云〻次に沙弥
二62法力直實入道遅參して申云善信聖人
二63御執筆何事哉と善信聖人のたまはく
二64信不退行不退の座をわけらるゝ也
二65と法力房申云然者法力もるへからす
二66信不退の座にまいるへしと云〻仍
二67これを書載たまふこゝに数百人の

二68 門徒群居すといへともさらに一言を
二69 のふる人なし是恐は自力の迷心
二70 に拘て金剛の真信に昏かいたすと
二71 ころか人みな無音のあひた執筆
二72 上人親鸞自名をのせたまふ良しは
二73 らくありて大師聖人被二仰一云源空も
二74 信不退の座につらなり侍るへし
二75 とこのとき門葉或は屈敬の氣
二76 をあらはし或は鬱悔のいろを
二77 ふくめり
二78 聖人親鸞のたまはくいにしへ
二79 我大師聖人の御前に聖信房勢觀
二80 房念佛房已下人〻おほかりし
二81 時はかりなき諍論をし侍る事
二82 ありきそのゆへは聖人の御信心と
二83 善信か信心といさゝかもかはるとこ
二84 ろあるへからすたゝひとつなりと申
二85 たりしにこの人〻とかめて云善信
二86 房の聖人の御信心とわか信心とひと
二87 しと申さるゝことはれなしいか
二88 てかひとしかるへきと善信申云なとか
二89 ひとしと申さゝるへきそのゆへは
二90 深智博覧にひとしからんとも申さ
二91 はこそまことにおほけなくもあら
二92 め往生の信心にいたりては一たひ他力
二93 信心のことはりを承しよりこのかた
二94 またくわたくしなししかれは聖人の
二95 御信心も他力よりたまはらせたまふ
二96 善信か信心も他力也故にひとしくし
二97 てかはるところなしと申也と申侍
二98 りしところに大師聖人まさしく
二99 被二仰一云信心のかはると申は自力の信

二100にとりてのことなりすなわち智恵各別
二101なるゆへに信又各別也他力の信心
二102は善悪の凡夫ともに佛のかたよりた
二103まはる信心なれは源空か信心も善信
二104房の信心もさらにかはるへからすたゝ
二105一なりわかかしこくて信するにあらす
二106信心のかはりあふておはしまさん人〻
二107はわかまいらむ淨土へはよもまいらせた
二108まはしよく〳〵こゝろえらるへき事
二109なりと云〻こゝに面〻舌を巻口を閉て
二110やみにけり

〔巻三〕

三1淨土宗興行によりて聖道門廢退
三2す是空師の所爲なりとて忽罪科せ
三3らるへきよし南北の碩才鬱申けり
三4顯淨土方便化身土文類六云竊以聖道諸教行
三5證久廢淨土真宗證道今盛然諸寺釋門昏
三6教兮不知真假門戸洛都儒林迷行兮無辯邪
三7正道路斯以興福寺學徒奏達太上天皇
三8今上聖暦承元丁卯歳
仲春上
諱尊成 号後鳥羽院 土御門院
三9旬之候主上臣下背法違義成忿結怨因
三10茲真宗興隆太祖源空法師并門徒数輩不
三11考罪科猥坐死罪或改僧儀賜姓名
遠流
三12予其一也尓者已非僧非俗是故以禿字爲姓
三13空師并弟子等坐諸方邊州經五年之居緒
三14云〻空聖人罪名藤井元彦配所土佐國幡多鸞
三15上人罪名藤井善信配所越後國國府此外の
三16門徒死罪流罪みな略之皇帝
諱爲仁号 佐渡院

三17 聖代建暦 辛 未 歳子月 中旬第七日中納言範光 岡崎
三18 郷(卿)をもちて勅免此時上人右のことく
三19 禿字を「カイ」書て奏聞し給ふに
三20 陛下叡感をくたし侍臣おほきに保
三21 美す勅免ありといへともかしこに
三22 化を施さんためになをしはらく在
三23 國し給けり

〔巻四〕

四1 聖人越後國より常陸國に越て笠間
四2 郡稲田郷と云ところに隠居したまふ
四3 幽栖を占といへとも道俗跡を尋蓬戸
四4 を閉といへとも貴賤衢に溢佛法弘通
四5 の本懐こゝに成就し衆生利益の宿念
四6 たちまちに満足す此時聖人被ニ仰一
四7 云救世菩薩の告命(カウ)をうけし往夢
四8 既今与符合せりと
四9 聖人常陸國にして一向専修の
四10 義をひろめたまふにおほよそ疑謗
四11 の輩は少信順の族は多し而一人
四12 の僧山臥云々ありて動は佛法に怨を成
四13 つゝ結句害心を挿て聖人を時々うかゝ
四14 いたてまつる聖人板敷山と云深山を
四15 恒に往反したまひけるに彼山
四16 にして度々相待といへとも更其節
四17 をとけすつら〳〵事の參差を案に
四18 頗奇特の思あり仍聖人に謁せん
四19 とおもふ心付て禅室に行て尋申
四20 に聖人左右なく出會たまひにけり
四21 すなわち尊顔にむかふに害心忽に

四22 消滅して剰後悔の涙禁かたし良
四23 暫ありて有のまゝに日者の宿鬱
四24 を述すといへとも聖人またおとろけ
四25 るいろなし立ところに弓箭を
四26 切刀杖を捨頭巾を取柿衣を改て
四27 佛教に歸しつゝ終に素懐を遂き不
四28 思議なりし事也すなわち明法房
四29 是也聖人つけ給き
四30 聖人東「トウクワン」関の堺を出て花城の路に
四31 赴ましくけり或日晩陰に及て箱根
四32 の険阻にかゝりつゝ遥行客の蹤を送
四33 て漸人屋の樞に近に夜もすてに
四34 暁更にをよむて月もはや孤嶺に
四35 かたふきぬ于二時一聖人あゆみよりつゝ案内
四36 し給ふにまことに齡「齡」傾たる翁のうる
四37 はしくしやうそきたるかいとこととく
四38 出會て云やう社廟ちかき所のならひ竺「巫」
四39 ともの夙一夜あそひし侍るにおきなも
四40 ましわりつるかいさゝか寄ゐ侍ると思
四41 ほとに夢にもあらすうつゝにもあら
四42 て權現被二仰一云只今我尊敬をいたすへき
四43 客人此路を過給へきことあり必慇
四44 懃の忠節を抽て殊丁寧の饗應を
四45 儲へしと示現いまた覺終さるに貴
四46 僧忽として影響したまへり何
四47 たゝ人にましまさん神勅是炳焉
四48 なり感應最恭敬すと云て尊重崛請
四49 したてまつりてさまくに飯食を粧
四50 いろくに珍味を調けり
四51 聖人古郷に歸て往事をおもふに
四52 年〻歳〻夢のことし幻のことし

四53 長(平)安(平軽)洛(入)陽(平)の栖も蹤をとゝむるに嬾
四54 とて扶(平)風(平軽)馮(平)翊(入)ところ〳〵に移住した
右京ナリ　左京ナリ　ウツリスム
四55 まひき五条西洞院わたり是一の勝地なり
四56 とてしはらく居をトたまふ今ー此いに
四57 しへ口決を傳面受を遂し門徒等をの
四58 おの好を慕路を尋て參集たまひ
四59 けりそのころ常陸國那荷西郡大部
四60 郷に平太郎なにかしと云庶民あり
四61 聖人の訓を信て専一なかりき而或
四62 時件平太郎所務に駈て熊野に詣へ
四63 しとて事由を尋申さむために聖人
四64 へ參たるに被仰云夫聖教万差也いつ
四65 れも機に相應すれは巨益あり但末
四66 法の今時聖道の修行にをきては成す
四67 へからすすなわち我末法時中億〻衆
四68 生起行修道未有一人得者と言唯有淨
四69 土一門可通入路と云〻此皆經釋の明文如ー
四70 来の金言也而今唯有淨土の真説に就
四71 て忝彼三國の祖師各此一宗を興行す所ー以に
四72 愚禿勸ところ更わたくしなし然に一
四73 向専念の義は往生の肝腑自宗の骨目也即
四74 三經に隠顯ありといへとも云レ文云レ義共明
四75 哉大經の三輩にも一向と勸て流通
四76 にはこれを弥勒に咐囑し觀經の
四77 九品にもしはらく三心と説て是又
四78 阿難に咐囑す小經一心説舎利弗ニ咐囑シ終に諸佛
四79 證誠す因ニ之一論主一心と判し和尚一向
四80 と釋す然則何の文に□(よ)りて一向専修
四81 の義立へからさるそや證誠殿の本
四82 地すなわちいまの教主なりかるかゆへ
四83 に左も右も衆生に結縁の志ふかき
四84 によりて和光の垂迹を留たまふ

四85 垂迹をとゝむる本意たゝ結縁の
四86 群類をして願海に引入せんとなり
四87 しかあれは本地の誓願を信して一
四88 向に念佛をことゝせむ輩公務にも
四89 したかひ領主にも駈仕てその靈地
四90 を踏その社廟に詣せん事更に
四91 自心の發起するところにあらす然者
（以下欠）

〔巻五〕

五1 聖人弘長二年壬戌仲冬下旬の候よりい
五2 さゝか不例の氣ましまし自二尓一此来口に
五3 世事をましへすたゝ佛恩のふかきこ
五4 とをのふ聲に餘言をあらわさすも
五5 はら稱名たふることなし而同第八日
時午
五6 頭北面西右脇に臥したまひてつゐに
五7 念佛の氣たへをはりぬ于二時一頽齢九
五8 旬に満たまふ禅房は長安馮翊の邊
五9 押小路南 万里小路東 なれははるかに河東の路を暦
五10 て洛陽東山の西麓鳥部野の南邊延
五11 仁寺に葬したてまつる遺骨を拾て
五12 同山麓鳥部野の北邊大谷にこれをお
五13 さめをはりぬ而終焉にあふ門弟勸化
五14 をうけし老若をの〳〵在世のいにしへ
五15 を思滅後のいまを悲て恋慕涕泣せすと
五16 いふことなし
五17 文永九年壬申冬比東山西麓鳥部野の北大
五18 谷の憤慕をあらためて同麓よりなを
五19 西吉水の北邊に遺骨を堀渡て佛閣
五20 を立影像を安す此時に當て聖人相
五21 傳の宗義いよ〳〵興し遺訓ます〳〵
五22 盛こと頗在世の昔に超たりすへて

五23 門葉國郡に充満し末流處〻に遍布
五24 して幾ー千ー萬といふことをしらす其
五25 稟教を重して彼報謝を抽る輩緇
五26 素老少面〻あゆみを運て年〻
五27 廟堂に詣す凡聖人在生の間奇特こ
五28 れおほしといへとも羅ー縷に不ー遑仍
五29 しかしなからこれを略するところ
五30 なり

五31 右縁起畫圖之志偏爲知恩報德
五32 不爲戲論狂言剩又馳紫毫拾翰林
五33 其躰尤拙其詞是苟付冥付顯有
五34 痛有恥雖然只憑後見賢者之
五35 取捨無顧當時愚案之紕繆而已
五36 于時永仁第三曆乙未應鐘仲旬第二天
五37 至于晡時終草了　執筆衡門覺如
五38 今同歳太呂仲旬第三天又書之